

新作リフィル
先行無料配布

宵闇の溢れて朝シリーズ

『夜を掬う ～クロスデルタ旅行記～』

燐果です。なんかねえ、文フリ36での新作リフィルの頒布を目標にやっていたんですけど、どう考えても間に合わないことがわかったので（遅い）とりあえず出せるところまで配布することにしました。もー。

せっかくなので(?)はじめての方のために軽く説明つけたりしてます。

これ読んで、好みだなーと思ってくれたらM-15遊びに来てね！

そもそもどんな世界観なの？

世界を二分した百年戦争で、人類は絶滅危惧種となっていました。そこで人類の代わりに戦っていたAIドロイド軍とキメラ獣人兵士軍が和解して、新しい世界を作ろう！ってことになったのね。

だけど、統一国家なんて無理無理。性質が違いすぎるもんね。ま、戦争だけはもう嫌／メリットを感じない、残った人類を保護して育てながら自分達の文化作ろうぜ、てことだけ意見一致して、約50年が過ぎました。

お話の舞台はクロスデルタ、あらゆる雑交が黙認される街。無法地帯と呼ばれて疎まれたり恐れられたりしてるその街にある『湯浴み処 黒竜館』と、運命に導かれるようにそこへ集まった人(?)たちの日常や過去を覗いていくシリーズです。

AIも獣人も好きな作者が「全部ぶっ込んだらあわせ」と思って書きはじめたヘキの話だったはずなのに意外とシビアな世界になったなコレ。

リフィルって何？

綴り込み表紙を利用しているので、今後は中身の追加分だけを頒布していく方式。

リフィルという言い方が合ってるのかはちょっとわからない。



#そこが黒竜館

彼らが消えたあとも、私は呆然とその建物を見つめていた。砂漠の街によくある、赤茶けた土壁の二階建てだ。少し大きめの玄関ドアは古びた木製である。少し離れた壁際にエアコンの室外機が見える。しかし暖炉も使うのだろうか、屋根には太い煙突もある。その手前で控えめに光っているのはネオンの看板だ。ひとつひとつは普通なのに、すべて合わせた建物としては、ちくはくさが際立っている。

私は、今回の旅のたずね人から送られてきた『手紙』を、高速展開した。

『わたしが寝起きし、働いている《湯浴み処 黒竜館》のこと、一緒に暮らしている仲間たちのことをご紹介しましょう。』

確かに『湯浴み処 黒竜館』と書かれている。やはり彼女が働いているのはここだ。思いの外あっさりが見つかったことに対して、なぜか少しがっかりしている自分を“発見”する。

そうなのだ、彼女に知り合ってからというもの、“思いもよらなかった自分”というものを発見してばかりいるのだが、それはまた後で語るとしよう。

とにかく、私はこの建物の居住者へアプローチしようと、玄関ドアの前に立った。まず先程の3人が現れることが予測できる。このシチュエーションに合致するいくつかの台詞をシミュレーションし、深呼吸をした。実際には呼吸していないのだが、そんな“心持ち”は私にだってある。手を目線の位置に掲げ、軽く握りこぶしを作る。手首のスナップを効かせ、そのこぶしをドアに2回ぶつける……”ノックする”のだ。ドアを壊さない程度の強さで、秒速三メートルほどの速さで……。

突然、ドアの向こう側で複数人の笑い声と足音がした。しかし私のシミュレーションはまだ終わっていない。緊急回避することにする。道路の向かいまで撤退、『BAR WOOD』と『ペーカリー ヤナッパ』の建物の間に身体を挟むようにして隠れながら、私は黒竜館の玄関を見つめた。

そんなわけで、次回文フリには新作リフィルでお会いしたい。書きたいものは結構あるんですよ。竜人トウバンの過去とか、グランマは人間なのか何なのかとか、フォリクルスなんて元セクサロイドで双子たちに再インストールされたってネタがあるのにまだ全然掘り下げられていないのでね。がんばります。ではまた。

2023.5.21 燐果

